あとらす ATLAS

参加型の総合文芸誌

No.49
2024

エッセイ
向坂勝之
熊谷文雄
岡田多喜男
紀行
川本卓史
岩井富美恵
岩井希文
評論
村井睦男
高橋和雅
小説
山根タカ子
漢詩
桑名靖生
短歌
関根キヌ子
歴史
恩田統夫
ブックレビュー
『湯澤毅然コレクション第1巻／アンバランス』
［日本自費出版文化賞エッセー部門賞］
受賞のことば　ハンス・ブリンクマン

門戸開放。内容厳選。
いつでも誰でも自由に参加できる
「文芸の場」へようこそ。

遥か昔、シュガーヒルへの旅

川本卓史

一・「シュガーヒル・イン」へ

はじめに

残り少ない日々を、昔を思い出すことで過ごす時間が増えました。そんな訳で、四半世紀も昔の旅を語りたいと思います。

一九九九年の夏、米国ニューハンプシャー州にあるシュガーヒルという小さな町まで旅をしました。一行は私を入れて四人ですが、うち三人は女性です。目的地は彼女たちにとってシュガーヒル・クッキーという名前が生まれた、いわば「発祥の地」です。

仲良くクッキーを作り続けてきたじゅん子（五八歳）、まり子（五二歳）、ちか子（四九歳）、それにツアー・コンダクターとしてじゅん子の亭主であるたかし（六十歳）が加わりました（ここでは名前だけの呼び捨てで、ひらがなで登場することに致します）。以下、記録係りとしてのたかしの筆による思い出話です。

「シュガーヒル・イン」のこと

思い起こせばこの旅の、さらに二十年近い昔、私たち（たかし&じゅん子）夫婦はニューヨークに住んでいました。その折り、まだ小学生だった二人の娘を連れて秋の三連休を利用して、シュガーヒルまで車で出掛けました。往復千二百キロを走り、シュガーヒル・インという宿に泊まりました。「遠くから来ただけの価値がある可愛らしいイン。友人の家の食堂で家庭料理を頂く雰囲気」と当時の日記にあります。

アメリカ合衆国東北部のマサチューセッツなど六つの州を総称してニューイングランド地方と呼びます。広大なアメリカ大陸の中でも面積としては小さいですが、現在の合衆国はここから始まった訳で、歴史的にも文化的にも重要な地域です。英国からのメイフラワー号が上陸したのはマサチューセッツ州プリマスで、独立革命はここニューイングランドか

ら生まれました。戦いはボストン郊外のレキシントンで始まりました。「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれる文化も花を咲かせました。ハーバードやイエール大学に代表される優れた教育制度もこの地で発展しました。

シュガーヒルの所在するニューハンプシャー州はその中でも北。カナダとの国境に近く、山や丘や田園地帯の多いのどかなところです。州の北部には、マウント・ワシントンというニューイングランドで一番高い山（千九百メートル）があります。夏は避暑で、秋はまわりの全山が真っ赤に染まるほどに紅葉が見事で、冬はスキー客が訪れ、有数の観光地も多くあります。

その中でシュガーヒルは、ルート一一九という州道に沿った、リゾート地の中心から少し外れている小さな町です。二〇二〇年の国勢調査によると人口は僅か六百四十七人、その殆どがいわゆる「白人」です。

じゅん子は、町の名前は、冬になると丘の上に雪が積もって、ちょうど砂糖を盛ったようになるからではないかと推測しました。その後、町境にある大きなサトウカエデ（シュガー・メイプル）の樹が町名の由来だと知りました。サトウカエデはカナダの国花で、国旗の中央にはこの樹の紅葉した葉が配置されます。

私たち一家四人（長男は前年日本の学校に復学していました）が「シュガーヒル・イン」に一泊したのは、一九八一年九月末、紅葉が始まったばかりの季節でした。そのころ私は、ニューイングランドの「カントリー・イン（country inn）」に凝っていました。安価でよさそうなところを見つけて泊まるのが楽しみでした。実際に出掛ける機会は限られましたが、これらを紹介する本を眺めながら行ったような気分になることが多かったのです。

カントリー・インとは、直訳すれば「田舎の宿」ですが、アメリカでは独特の語感と懐かしさを持って使われるように感じます。「歴史的（ヒストリカル）」という形容詞を付けて使われることもあります。あまり大きな宿ではなく、夫婦で経営していて、周りの田園風景や素朴ながら品の良い造りや家庭的な雰囲気を売り物にしているところが多いです。夕食を出さないB&B（ベッド・アンド・ブレックファスト）のところもあります。

後年ロンドンに勤務する機会があって、こういう宿のコンセプトや存在は英国輸入なのだと理解しました。英国にも同じような田舎の宿があって、これらを紹介する本がいろいろあり、写真を眺めるだけで楽しめます。

ニューヨーク時代に私が愛読したのは『ニューイングランドお勧めのイン』というガイドブックで、「シュガーヒル・イン」もお勧めの一つでした。このときここを私が選んだのは、その可愛らしい名前にも惹かれたのだと思います。

続きは「あとらす」49号で
参加型の総合文芸誌

昭和天皇の戦後

―田島道治『昭和天皇拝謁記』に見る―

向坂勝之

『昭和天皇拝謁記』（以下『拝謁記』と略す）は初代宮内庁長官、田島道治が在任中（一九四八―五三年）に昭和天皇と交わした面談の克明な記録で、二〇一九年に田島の遺族により公開された。本記録は六人の研究者から成る編集委員によって解読され、詳細な検証を経て岩波書店から刊行されて昨年五月に全七巻の完結を見た。

昭和天皇についてはこれまで多くの記録、伝記類が書かれて居り、二〇一四年には宮内庁より公式記録『昭和天皇実録』全六十巻も公開された。こうした中には学術的に優れた研究もあるが、多くは所謂「顕彰録」の類いで、学問的な批判に耐えるものは意外に少ない。ましてや等身大の天皇を知る手掛りはほとんど無い。天皇の肉声を伝える記録となるとさらに少なく、我々が目にすることが出来るのは（『昭和天皇実録』の他は）、敗戦直後に東京裁判への準備としてまとめられた所謂『昭和天皇独白録』（一九九一年、文藝春秋社）のみであった。『拝謁記』はその点で、戦後の五年間に限られるとは言え肉声の記録で、昭和最大の政治家であった天皇の実像に迫る第一級の史料である。筆者も第一巻から丁寧に読んできたが、従来の天皇像を修正せざるを得ない新しい発見に満ちて居り、日本近代史と天皇制に関心を持つ者として、齢甲斐もなく興奮を覚えた。公開後『拝謁記』は大きな話題となり、ＮＨＫはドキュメンタリー・ドラマに仕立てゝ放映したので、ご覧になった方も少なくないと思う。（橋爪功が主役の田島を好演していた）

全七巻は五巻に及ぶ拝謁記録と、当該時期の「田島道治日記」及び来簡の各一巻から成るが、あくまで記録、史料であって著作ではないので、筆者が『拝謁記』から得た戦後の昭和天皇像を述べることで書評に替えたい。

筆者が強い印象を得た第一は、昭和天皇は最後まで「象徴天皇」が理解出来なかったようだという点。天皇には「立憲君主」が理解も出来、受け容れられる限界であった。

第二に、天皇は理想的な「帝王学」を受けたはずだが、二十世紀の政治家に最も必要なはずの社会科学的素養はほとんど学んでいない。

第三に、天皇は極めて強い反共主義者であるということ。

第四に、天皇は自分の家族はもちろん、皇族全体や、時に

は戦後一市民になった旧皇族まで含む大家族の「家父長」としての自覚が強く、それぞれに細心の気配りをしている。

最後の「家父長としての天皇」から見てゆけば、天皇には二男五女があり、妻（香淳皇后）とともに我々の云う「小家族」を成していた。戦後の緊張を強いられた時代にあっても妻子への愛情は極めて細やかで、殊に嫁ぐ娘たちへの心配りには並々ならぬものがあり、感銘を受ける。この他に母親（貞明皇后）と三人の弟も敗戦後まで健在であった。長弟（秩父宮）、次弟（高松宮）とは齢も近く、戦前から兄弟にありがちな確執があったが、戦後も天皇の在り方をめぐって見解に相違も見られ、しばしば田島との話題になっている。

さらにこの他に天皇には「旧皇族」と呼ばれる人々が居た。ほとんどが南北朝時代の北朝の天皇、崇光院の子孫である「伏見宮家」とその明治以降の分家で、親戚と言っても現天皇家からは六百年近く遡らねば辿り着けない遠縁である。当時十一宮家五十一人が居たが、一九四七年に皇籍を離脱して一般市民になった。その際多少の一時金が与えられたが、戦後の経済的混乱でほとんどが生活に困窮し、不祥事に巻き込まれる者も少なくなかった。彼らは既に皇族ではないのだが、天皇は彼らの生活にも心遣いを見せ、その為の具体的な配慮は宮内庁長官田島の仕事のかなりの部分を占めていた。戦後「家」制度が廃されたとはいえ、皇室にはその残滓が少なからず見られ、彼らへの心配りも欠かせなかったのである。以上は天皇の私的生活である。

残る三点について少し詳細に見てゆこう。先ず第一点の「象徴天皇」について。

新憲法の「象徴天皇」も広義には立憲君主制の一つではあるが、一切の政治的権限がない点で究極の制限君主制と言える。それでも天皇には、首相以下の「内奏」などを通じて内外の第一級の情報が届いていた。しかし「内奏」は非公式なもので、象徴天皇に必要な教養の一環として行われるのであって、天皇の感想を聞くものでも、ましてや意見を聞く場でもない。敗戦までの天皇は主権者であり、首相以下の「奏上」には意見を述べ「裁可」を与えていたが、「象徴天皇」は首相以下への影響を避けるため、意見はおろか感想を述べることも控えねばならない。天皇にはこれが大いに不満で、「英国王は首相と二人きりの時は自分の意見を述べることが許されるそうだが―」と田島に訴えるのだが、田島は立憲君主と象徴天皇の違いを丁寧に説明し、天皇を諭している。

田島の退任後の話だが、防衛庁長官（当時）による「内奏漏洩事件」をご記憶の方があろう。一九七三年、増原恵吉長官の内奏に際し天皇が「近隣諸国に比べ自衛力がさほど大きいとは思えないが、何故国会でこれが問題になるのか？」と質問し、増原が「我が国は専守防衛を基本とするので、その点から様々な議論があり得る」と応じると、天皇は「防衛問

続きは「あとらす」49号で
参加型の総合文芸誌

「The Sound of Silence」とその時代

ダニエル・ベルの主張と日本の新しい取り組み事例

村井睦男

はじめに

発端はここからであった。ポール・サイモンとガーファンクルの「サウンド・オブ・サイレンス」から始まった。それは、友人が学生時代の頃の思い出に懐かしいだろうからとメールに添付してよこした一曲であった。これは1960年代に世界的に大ヒットした昔懐かしい曲であり、そのメロディは今でも覚えていてすぐに反応し口ずさむことができるほどであった。

しかし、彼ら二人が歌っているメロディになつかしさはあるものの、私の関心はそれではなく、この歌の題名と歌詞が示す内容についてであった。当時メロディの斬新な美しさと二人の絶妙なハーモニーに感心していたが、歌詞の意味するところまではあまり関心がなかったように記憶している。この曲の作詞、作曲はポール・サイモンで、今回はこの題名「サウンド・オブ・サイレンス　The Sound of Silence」そのものの意味にこそ興味を惹かれたのであった。

「沈黙の響き（音）」あるいは「沈黙のなかで聞こえる声無き声」とはそれ自体自己矛盾しているように思われるが、それはどのようなものか、何を意味しているのか、沈黙のなかに音は存在しているのか、誰かが、何の目的で発しているのか、それに対して人々はそれに気づいているのか、いないのか、気づいている人はそれにどう反応しようとしているというのか、等々非常に気になったのである。少し長くなるがここに歌詞を示すと次のとおりである。

（この歌詞の邦訳はロバート・ヒルバーン著・奥田祐士訳『ポール・サイモン　音楽と人生を語る』（注①）を参照した。）

Hello darkness, my old friend
　やぁ暗闇、わが旧友よ
I've come to talk with you again

またきみと話しに来てしまった
Because a vision softly creeping
そっと忍び寄ってくる幻が
Left its seeds while I was sleeping
眠っている間に種を撒いて行ったから
And the vision that was planted
そして僕の頭に植え付けられた
In my brain still remains
その幻は今も消え残っている
Within the sound of silence
沈黙の響きのなかに

In restless dreams I walked alone
せわしない夢のなかを僕は一人歩いた
Narrow streets of cobblestone
丸石敷きの狭い舗道を
Neath the halo of a street lamp
街灯の光の輪の下で
I turned my collar to the cold and damp
寒さと湿気に僕は襟を立てた
When my eyes were stabbed by
すると夜を引き裂くネオン照明の
The flash of a neon light that split the night
閃光に僕の目は刺され
And touched the sound of silence
沈黙の響きに触れた

And in the naked light I saw
裸電球の下で　僕は見た
Ten thousand people. maybe more
一万かもっと多くの群衆を
People talking without speaking
口を開かずに話す人々
People hearing without listening
耳を傾けずに聞く人々
People writing songs
だれの声も分かち合うことのない曲を
That voices never share
書く人々
And no one dared
そして誰もあえて　沈黙の響きを
Disturb the sound of silence
かき乱そうとはしない

“Fools”, said I, “You do not know
「馬鹿な」と僕は言った「君たちは知らないんだ

続きは「あとらす」49号で
参加型の総合文芸誌

音楽展示をめぐる小考

シカゴ歴史博物館“Amplified : Chicago Blues”の展示評を中心に

髙橋和雅

1　音楽展示の方法論をめぐって

近年、博物館界隈では、「音楽を展示すること」への関心が改めて高まりを見せつつあるようだ。立体音響や仮想現実（VR）など技術的な選択肢が広がりゆく昨今、音楽を展示する「方法論」について、ひいてはそこから帰結する音楽展示の「意義」と「固有性」について、新たに議論が交わされ始めているように見える。

たとえば二〇一九年、アートマネージメント論に通じる河原啓子は、これまでの音楽展示の諸事例を整理したうえで、その展示形式が備える可能性と有用性について改めて議論を展開した。河原は、そもそも音楽展示の特異性は、モノを体系的に「実見」させる装置である博物館において、観客が「聴覚を伴う鑑賞」を求めざるを得ないというところにある、と主張する。そして、そのジレンマを乗り越えるために、あるいはそのジレンマを別角度から払拭するために、これまで音楽展示においては、ミュージアム・コンサートの実施や音楽家の貴重な遺品の展示、あるいはコンピューター・プログラミングによりランダム生成される音楽と映像の展示といった、様々なアプローチが試みられてきたと論じる。そのうえで、ジレンマを解消するためのそうした種々の方策はむしろ、従来の展示にはない「いま」「ここに」「一回限り」という特色、すなわち複製技術時代に消滅したとされる一回性の「アウラ」を生じさせるとし、その点にこそ音楽展示の有用性があるのだと結論づけている。[1] また、メディア論とミュージアム研究を専門とする村田麻里子は近年の論文において、「ポピュラー文化」を展示する方法を検討するというテーマ設定のもと、特にポピュラー音楽展示の手法と課題について重点的な検討を行なっている。村田は、二〇一三年と二〇一五年に神奈川県内で開催された「70’sバイブレーション！」展を主な事例として、「展示空間で音を流すこと」の難しさやそれらの音楽に付随する権利と許諾の問題などを取り上げ、音楽展示に

まつわるいくつかの方法論的課題を浮き彫りにしている。[2] さらに二〇二一年、博物館論、文化資源学に精通する寺田鮎美は、「ミュージアムと音」を主題とする論考で、現代の博物館における「音」「聴覚」の活用可能性を総合的に検討した。寺田はまず、コロナ禍でハンズオン展示（手で触れることが可能な体験型展示）に制限が加えられている昨今の状況を鑑みたうえで、改めて「聴覚」を通じて来館者の博物館体験を豊かにすることの重要性を指摘する。そのうえで、「サウンドスケープ・デザイン」や「音による拡張現実（AR）の導入」といった諸々のアプローチを例示し、検討している。これらは音楽展示に特化した議論というよりは、いわば「音」と博物館の関係性を問い直す総論といえるが、しかし同論考おいてはほかならぬ「音楽」に導かれるAR体験の可能性なども挙げられており、そうした意味では音楽展示の方法論を問う文脈においても重要な議論であると見ることができる。[3]

あるいは音楽展示について論じた近年の研究としては、井上裕太の『日本音楽博物館論』もまた、注目すべき成果であろう。博物館学や博物館の歴史的研究に通じる井上は、本書においてまず、明治から近現代にかけての国内の音楽博物館の思想的、および実際的な変遷を体系化してまとめることを試みている。そして、その整理のうえで、現代の国内音楽博物館を形態別に「分類」し、それぞれの音楽博物館の現状と課題を浮き彫りにしている。すなわち、寺田研究同様に本書もまた、必ずしも音楽展示の方法論に特化した研究ではない。しかし、各博物館の現状の整理を進めるなかで、ある種必然的にそれぞれの音楽展示についても詳細な検討がなされることとなっている。たとえば「音楽家博物館」には「真正性を重視し、音楽家自身の生活ぶりの表出する」展示、「民族音楽博物館」には「伝統芸能と組み合わせて地域文化として発信する」展示、といったように、各展示方式の細かな例示と検証がなされているのである。なかでも井上は、音楽家顕彰の一環として行なわれる展示を厚めに取り上げており、実際に東海林太郎や上原敏に関する事例に触れながら、「音楽家個人の人間性の表出する展示」を目指す方向に発展の可能性を見出している。これらを鑑みるに、音楽展示の方法論部分に関しても、本書は肝要な議論を展開していると見て取ることができるのである。[4]

加えて、個々の研究者や学芸員、博物館関係者による提言はもちろん、博物館全体で音楽展示のあり方を模索する試みも、改めて進みつつあるといえる。近年の事例で特に注目すべきは、国立民族学博物館の取り組みであろう。国立民族学博物館はかねてより「モノとしての楽器の展示」に留まらない「文化としての音、音楽の展示」を標榜し、常設的に音楽展示を行なってきたわけだが、二〇二一年三月にその内容を一部リニューアルするに至った。このリニューアルでは、音のイメージにあわせたプロジェクションマッピングの導入や、

続きは「あとらす」49号で
参加型の総合文芸誌